令和３年度　浦添市まちづくりアカデミー
第７回

１２月１日（水）１４時～１７時　　１７時～１８時
一部場所：市役所ロビー　　二部場所：９階講堂

第7回講座『第6回の講座発表展示・地域活動の相談コーナー』

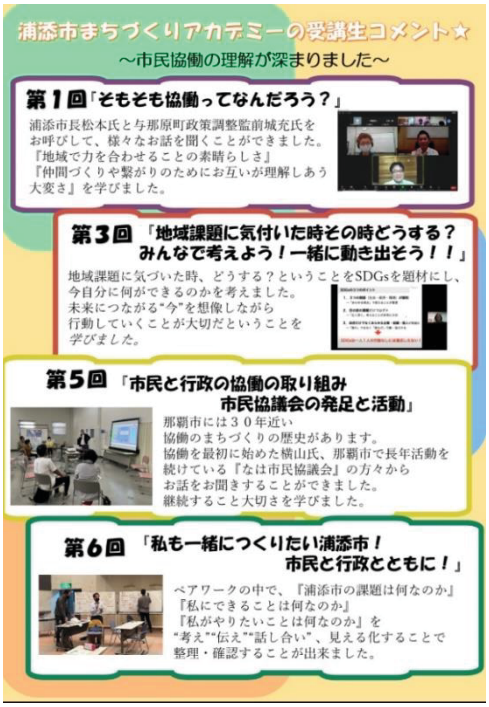
サポーター：　前城　充　氏（与那原町政策調整監）
大城　喜江子　氏　（一般社団法人　まちづくりうらそえ　代表理事）

ひょっこりさん：　浦崎　修　氏　（HODおきなわ）

※本庁１階ロビーにて

アカデミーで学んだことを
市民の皆様にお話ししました！

閉講式にて、集合写真



チラシを配布し、展示を見てもらいながら今まで学んだことの成果を発表しました。

浦添市まちづくりアカデミー　全体を通しての感想

・参加する中で気づいたことは、楽しくいつもやりたいという思いがあって、ただ忙しくてどうやったら楽しくできるんだろうというのも同時に考えるんですけど、でもこちらに参加したかったのは、子どもが育った後に、愛されるまちになるといいなという思いが一番強くて、何をどうやったらうまく関われるのかなとか楽しくできるかなというところで、でも話を聞いている中で、やっぱり知れば知るほど、なんかやってみたいねということが生まれてくるので、不思議だなというところがあって、それを自分の価値観がそこにやりたいなとかそういうところにいったら、それをやることで仕事の時間もうまく回せるように実はなっていくみたいなそういった心の動きとかそれが仕事がより効率的になるなんか不思議な動きを自分の中で発見して、続けながら楽しみながら面白さも発見しながら、今後も何らかの形で関わり続けていって、自分も何かやっていきたいなという思いがいっぱいになったアカデミーでした。ありがとうございました。

・私は本当は始める前に Zoom で開催するということで、パソコンを触ったことがなくて、『今回はキャンセルします。』と事務局に連絡を入れた時に、『宮城っ子児童センターでセッティングしてくれるので、そこで参加してください。』ということがあって、それに甘えて児童館の職員にお世話になりました。今日は参加させてもらって、最初浦添市まちづくりアカデミーって言った時に、浦添市のまちづくりに何か役立てることがあればという気持ちから何かできるのかなということと皆さん参加者から色々学ぶことがあるんじゃないかなということっで本当にそういう単純な気持ちで参加しましたら、いっぱい得ることがありました。ぜひ、このアカデミーで学んだことを、また身近なところから自分の足元からそれをしっかり生かして、役立てていきたいなと思いました。
ハチの養蜂の話を聞いた時から、『これやりたい』と思って、すぐ主人に『子ども食堂でやりたい』と言い出して、その日なって主人も『ぜひしたいね』ってなって、『したいね』というよりかは、『やろうね』になってしまっています。ぜひ、実現できるように頑張っていきたいと思います。ありがとうございました。

・２５年仕事をしていて、７月に定年退職をしまして、広報とかでずっと浦添がやっていることを見ていました。協働っていうのも正直言って、自分が思っているのと、入ってきて色々聞いていると毎回毎回、『あっ、勘違いしているか』『違ってた』と思いつつ頑張りました。その中で本当にもったいないなと思ったのが、私参加して初めてこういう事をやってらっしゃると知ったんですね。これをもっと知らしめる方法ないかな。広報をちゃんと読んでいるつもりでしたが、見るものと参加するものと全然違う。だから、絶対参加する、出てくるというのが絶対必要なんだなと。やっていくうちに『あっ、行動なんだ』と『動くことなんだ』ということに気付きました。ところがまだ目から鱗状態で何をしようというのはまだないんですが。ありがとうございました。

・私は市の職員として働いています。私は生まれも職場もずっと浦添市で、浦添市で何かできることはないかなと思っていた時に、小中高と同級生の下地さんから誘われて、ちょうどいい機会だからということで参加することが出来ました。行政という立場ではなくて、皆さんと同じ市民立場で学ぶことが出来ました。また、自分に何ができるかなというところで第６回のペアワークのところで、一緒にペアを組んだ方と環境の話をさせていただいたんですけど、私が住んでいる仲間は景観地域なもんですから、そこで緑を増やすような活動が自分にはできないかな？という話をしたら、ペアの方は昆虫が好きな方で、緑を増やして昆虫を増やして、色んな昆虫が集まる環境を作って、またそれを子ども達に見せてそういった教育につなげていきたいとのことで、色んな考えを持つ方がいるんだなというところで、非常に色んな勉強が出来ました。またこういった活動に参加させていただきたいと思います。ありがとうございました。

・私も浦添小、浦添中、浦添高とずっと浦添市で生まれ育って、子育ても今沢岻小学校に通っていたり、ずっとずっと浦添で育っているので、４０代を迎えて今まで仕事をしながら自分の目の前の人生ことを一生懸命生きてきたんですけど、子どもが生きている未来が自分たちが今歩いている未来に全部つながっているんだなって、SDGｓの視点もいっぱい学ばせていただいたんですけど、本当にそういう事を意識するようになった時にタイミングよく facebook で浦添市まちづくりアカデミーのお知らせが上がってきて、ビビッと来てそこからご縁をいただいて今日まで受けさせていただきました。子ども達と普段接する中でいろいろ私達が見えてきた課題を『どうすればいいんだろう』って思った時に回を重ねるごとに、地域で見つけたその人の課題を自分事にして、じゃあ何ができるかって考えていこうという一つ一つの言葉とか市長もそうですけども、一緒に受講している皆さんの声掛けとかメッセージとかが、自分事のように全部すごく今回入ってきて、回を重ねごとにどんどんどんどんうらそえが好きになっていったり、未来についてワクワクしてきたり、参加させていただいてこの３か月とっても良かったなって、学びがいっぱいでした。ありがとうございます。この学び、ワクワクを来年にしっかり繋げたくて、『まちづくりプラン賞』に挑戦したいと思っております。

・大変気付くこと、学ぶことの多い充実した講座だったと思います。なのでまた、来年度も同じアカデミーが開催されると思いますので、多くの若い方だったり定年後の特に男性ですかね。の方が受講されて、色んな公共のことというか自分のことを一生懸命やってこられた方こそ皆さんのためにというか公共のことに関わるといろいろと発展していくんじゃないかなということを自分も受講してみて思いました。周りの定年を迎えるおじさんたちがたくさん周りにいますから、ちょっと声をかけてこういうアカデミーというのがあるので受講してくださいとか、若者たちも。アカデミーで一番良かったのは平日の夜の時間帯だったので、僕のような日中仕事している人でも参加しやすかったというのもあったので、声もかけやすいかなと思うので、多くの方が受講していっていくことが、次世代が育っていくことが協働につながっていくと思いますので、受講生の一人として宣伝していきたいと思います。ありがとうございました。

第１回　鼎談テープ起こし

〇大城：大学で学んでいたのは、政治や経済だったと思うのですが、福祉の仕事を始めたきっかけは？

市長：なぜ福祉の仕事か。大学時代に、ヒッチハイクでヨーロッパをバックパッカーとして回っていた時に、お金が無くなってしまって住み込みで働かなくてはいけなくなって、飛び込みで働いたところが、いわゆる知的障害をお持ちの方の施設だったものですから、そこで初めて福祉の世界に触れて、それがずっと記憶にあって、大学を卒業して東京で金融系の会社に就職して。その時も金融がやりたかったわけではなくて、何がしたいのかよくわからないままとりあえず東京で勤めながらやっぱり自分のやりたい仕事って何だろうと考えたときに、大学の時にヨーロッパで経験した福祉の世界が懐かしいというかもう一回あの世界に行きたいなと思い勉強しなおしました。

〇大城：充さんが南風原町でかなり住民参画の総合計画を市民と一緒にやったじゃないですか？どうして市民も一緒にと思われたのかなと思いまして。

前城氏：総合計画と住民協力関係というのを話す前に。私の公務員人生を変えたことが３９歳のときなんです。それまではのほほんと公務員生活を送っていたのですが、琉球大学の島袋純教授（高校の同級生）と再会して、彼は政治・行政のプロなので私にいろいろ質問するんですね。その時彼がする質問が全く理解できなくて、彼は学者のレベルで質問してくるので。恥ずかしくなって。それで、彼から『北海道のニセコというすごい街があるぞ』とニセコを知って、調べてみたらすごい街（当時は、日本の中で最先端。人口６０００人。）だった。彼と一緒に視察に行ったんですけど、そこで行われていたのは、徹底的な住民参加・情報共有だったわけです。もう目から鱗でしたね。そのきっかけがなければ、今の私はいない。まず第一に、島袋純と再会したこと。そして、恥をかいたこと。ニセコで学んで、『ああそうか住民参加って大事なんだ』と気づかされて、そこからいろいろあって。タイミングよく係長のポジションについたので、『よっしゃ！まずはやってみよう』ということで、ニセコをまねてやってみたのが大まかな流れですね。

〇大城：南風原町で取り入れるのはなかなか簡単にいかなかったと思うんですが、住民参加というのは。どんな感じでやったんでしょうか。

前城氏：住民って、行政を信用してくれているんですけど、一方で何かあると行政に意見を言ってくるじゃないですか。住民参加といっても公募で４０名くらい集まってもらって。その中に一割ぐらいは『行政に何かモノ言ってやろう』という感じで来ている方々がいらっしゃるんですよ。でも、これもニセコ町に行ったときに学んだんです。『前城さん、一割ぐらいは石を投げる人（行政に対していろいろ言ってくる人）は絶対います。その方々が行政にとっても関心を持っています。この方々と徹底的に話し合ってください。そしたら、この方々は最強の味方になってくれます。』と聞いていたんですよ。

だから、公募の最初の時の会合やった時に、いろいろな意見があって。『あっ、この方々なんだぁ』と思って。私の中では、安心感がありました。『いた、いた』って感じで。いろいろあったんですけど、最終的には徹底的に情報を共有してやってよかったということしかないですね。

○大城：福祉のお仕事をしていた時にはいろいろな皆さんと協力しながらの仕事の在り方だったんじゃないかなと思うんですけど、それはどんな感じでしたか。

市長：まぁ、福祉の世界もですね。今や福祉の関係者だけで福祉が支えられる時代ではないですし。例えば、介護のスタッフだけで高齢者を支えていくことが不可能な時代になってきていて、福祉や介護の世界でも住民を巻き込んだり、家族を巻き込んだり、あるいは近隣の住民の方を巻き込んで支えていくということをこれまでもやられてきたし、さらにこれからもやっていかなくてはならないだろうと思っています。そういった意味では、行政も住民が参加して作っていくという意味では同じようなプロセスでやっていくんだろうと思っています。

○大城：市民が参画することでどんないいことがあるのかなとちょっとお聞きしたいのですが。

前城氏：おこがましいんですけど、住民と情報を共有すると住民が育っていく。結局ですね。情報の質と量がやっぱり行政職員と住民でかなりの開きがあるんですよ。総合計画もそうでした。南風原で福祉計画を作った時も行政の方から住民の皆さんにわかりやすく丁寧に何回も説明するんですよ。いろいろな、データとか情報を。そうすると知らないことを知るわけですよ。そうすると興味を持ってくれてだんだん自分の経験値からいろんな意見をだしてくれるようになってきて。住民は自分で自分のことを。『自分はこんなことが言えるんだ』『私成長してるかも』と感じるわけですよ。そういう関係性がでてくると、また住民同士がいろいろな意見を言い合ってですね。建設的な意見がでてきて、紆余曲折あるんですけども、最終的にはまとまっていく。
さっき冒頭で言ったように、計画を作っていくプロセスの中で育っていくんですよ。これは職員も育っていくんですよ。逆に。住民だけではなく職員も気づかされるんですよ。視点が違う意見が上がってくるので。『住民の方ってこんな考えもってたんだ』というのが出てくるので、何回も何回も最低でも１０回はやりましたもんね。だんだんだんだんお互いアシストしあう関係が作られていくのが一番のメリットという感じがしますね。
喜江子さん、一番わかりやすく説明するというのが難しいんですよ。行政用語結構あって、行政マン同士は通じるんですけども。市民からだと伝わらないことが多いんですね。わかりやすく伝えるというのは、すごいスキルがいるんですね。その点でも職員は成長しますね。

〇大城：成長がみられるわけですよね。市民も行政も。市長、市民も行政マンも育つというのがあるみたいです。市民と行政が育った時に、市長はどんなふうにうれしいのかなと思ったりするんですけど

市長：市民と職員が一緒になって協働してお互いが苦手なところを補いながら、一緒に何かを作っていければ、市長としてうれしいの前に。こんな楽なことはないですよ。いつも、『皆さんで決めていいんですよ』と言うんですけど。逆に市民同士でも決められないことが沢山出てくるんですよね。いつも職員に言っているのが、『私たちが困っていることも市民に全部話しなさい』と予算的なこととか、行政職員として法律だったり、議会だったり、その他の関係性がすぐ頭に浮かぶもんですから。市民から言われて『そうですね。』と言いながら、心の中では『それ、無理なんだよな。』と思っている人はいっぱいいるんですよ。そうじゃなくて、『実は、素晴らしい話だけど、こういうハードルがあるんです。それをやると、こういう側面も出てくるんです。』ということを、ありのままに話していかないと。職員の皆さんは『どうせ市民にこういう話をしたって、市民は真剣に考えて責任まで負ってくれないしな』という。市民は市民で、行政・市長に言えば何でもやってくれると思っていて、一緒に考えましょうと言いながら、自分のアイディアを全部飲み込んでほしいと思っている方もたくさんいるわけですよ。だから、ここを一つ一つ時間をかけて乗り越えていくためには、市長も市役所職員もスーパーマンではないんだ。お金もジャブジャブあるわけではない。そして一つ一つ議会を通さないといけない案件もある。浦添市だけで、決められないこともたくさんある。喜びとか、夢とか、楽しみだけではなくて、苦しみもハードルもそして限界も住民の皆さんと共有しながら、何かを作っていくというプロセスができればそれが本当の協働だと思います。

前城氏：職員って若くなればなるほど、怖いんですよ。住民の中に入っていくのが。住民は関係なくガガガっと言ってくるんですよ。私ぐらいになってくると、いろいろなことを考えて、言葉も選んでしゃべれるんですけど、喋れませんよ。圧倒されます。職員が、住民参加型をやった時に『住民が怖い』といったんですよ。素直に。住民の前で。本音ですよ。『やっぱそうなんだよな。本心は。』住民が気付いたんですよ。『なんで怖いの？』『いや、だっていろいろ言われるもん』って。本音で言ったから、住民の皆さんも『あっ、なるほど。』となった。もう一つですね。私が取り組んだ時に、必ず、飲み会をセットにしたんですよ。ワークショップをする公民館の会議室が第一会議室なんですよ。公民館の近くの居酒屋が第二会議室なんですよ。第一会議室に参加した方々が三分の一くらいは流れましたかね。ここはですね。容赦なくお互いが言う場なんですよ。もう本当に口喧嘩なんですよ。『あの時はあんないったけど、本当はこんななんだよ。』さっき市長が言ったような感じですよ。『実はこんなに課題があるんだよ。』アルコールが入るといえるんですよね。これが何回か続くと打ち解けてくるんですよ。やっぱ、飲み会はいいですね。以上。

〇大城：市長がお話していた。行政はどうしようというのを充さんが解説したんではないかなと思うんですけど。本音でやってというのを充さんはやられたわけですよね。やっぱり『怖い』と言うのは大変だと思うんですよね。でも、言える場があったからこそつながっていったんではないかと聞いていて思ったんですね。やっぱり取り繕った言葉では通じない言葉を、第一会議室があってそこで、距離感を持ちながらやってそれで、第二会場ではないんですね。そこも第二会議室なんですね。ざっくばらんに話せる。

市長：そのお酒の力を借りて、でもいいんですけど。充さんが言っていたように市民と職員がもっともっと胸襟を開いて本当にいろんなものが言い合える、本音のトークができるところまでいかないと本当の協働はできないような気がします。そもそも協働なんかしなくてもできていることはもうやっているはずなんですよね。だけど職員としてもいろいろな限界の中で、気が付いていてもやりたくても手が出せなかったり、あるいは上司から止められていたり、そういった事情があるのが現状だろうと思います。先ほど職員が市民が怖いと言っていた気持ちもよくわかってきたんですよ。僕は逆に市民から、いきなり市長になったから、『なんで市民が怖いのかな』とよくわからなかったんですけど、でもやっぱり市役所に４年８年と努めていくと、職員の皆さんが本当にトラウマのようにいろんな経験をしている人もいるわけですよ。痛い目にあって、後日上司に怒られたり、後日議会で炎上したり、いろんなことがあってもうそういうことができなくなっている職員もやっぱりいるわけですよ。だから、そこをもう一回乗り越えていけるような。ただ、時代とともに一歩ずつ一歩ずつやりやすくはなっていると思います。若い職員なんかもどんどん市民の中に出て行ってですね。一緒に議論できていますし。僕は市民の方もだいぶ変わったと思います。今はきちんと私たちがいろんな予算的な限界、いろんなハードルの話をすると『そういう側面もあるんだなぁ』ということで、わかっていくのでやっぱり、お互いにいろいろなことを話し合ってですね、行くのがまず第一歩かなという感じがしますね。

前城氏：今の市長の話を聞いて。トラウマを抱えている人がいるんですよ。それからいろんな部署にいろんな方々がいて、市民の皆さんが『ほんとにこれ出来るか？』と思うものも、言ってくる場合があるわけですね。私たちがやった時に、必ず市民の方々に返した言葉が『この問題何ができますかね？皆さんは。協力できますかね？何ができますかね？』と何回も何回も質問してたんですよ。そしたら、やっぱり考えてくれるようになって、『我々だったら、これができますね。』とか『だから行政はこれやって』とか。お互いキャッチボールができるようになったので。そういうのは何回も回数を重ねてやっと言えるようになってきた感じかなと。だから、計画を変えるとか、計画を新しく作るとき、ワークショップの回数に僕はすごい比重を置くんですよ。３回以下だったら、もう関係性なんか作れないですね。だから私がやった時は町長にも『１０回はやりますから。』ってやったんですよ。もう１０回くらいやると意思疎通ができるんですよ。時間も必要なんですよ。もう一つ町長と約束したのが、『住民会議は謝礼払いません』『大丈夫か？』『大丈夫です。思いがある人が集まりますから。情報共有を徹底的にやると参加者の方がどんどん盛り上がってきますから。』って、何も自信もないですけどこうやってできますからって言ったんですよ。それで当時の町長は、『わかった』と言って、やらせてくれたんですよ。無報酬というのが住民にとってすごく良かったなと。対等な立場なので。３回公募し直したんですよ。住民会議は。なぜかというと、最初にやったメンバーでいろいろな意見集めて案を作ったものが、『この３０名４０名で決まったものでしょ』って言われたら参加した人も面白くないので、解散して公募しなおして、最初の方々が半分くらい毎回残ってくれたんです。その中には学生もいたんですよ。その子が言ったんですよ。『前城さん、私たち無報酬でよかった。』『なんで？』『報酬もらったら、気持ち悪い。』気持ち悪いって言ったんですよ。言葉としての感情から、『気持ち悪い』って言ったんですよ。『こんなのもらいたくない』と。対等っていう気持ちがその時あったんでしょうね。回数ってとっても大事なんですよ。

市長：回数というか、時間なんでしょうね。それだけ共有した時間なんでしょうね。

○大城：共に過ごして、やっぱり会話を交わすとか共有するとかが大事さなんだろうなと思って聞いているんですけど。昨日、那覇市の１００周年記念があって高崎経済大学の櫻井先生をお呼びしてのお話だったんですね、昨日のお話も協働だったんですよ。協働って、例えば企業と企業が協力しあうのが協働ではないよとおっしゃってらしたんです。協働って何？って言ったときに、市長も充さんもお話している、お互いが育つであったり、目的を果たすために一緒に話し合いをして、培っていってというプロセスがすごく大事だと仰っていたんですね。なので、やっぱり関係性をしっかり作っていくという大事さの中から、協力して、一緒に働いて、お互いを分かり合ってというところが出るんだろうなということが、すごくよくわかりました。
市長と充さんが仰っているのも、何度も交わしてってことですよね。行政も市民を信じる、市民も行政を信じるというお互いの信頼関係をどう作っていくのかという大事さがあるような感じで、聞いていますけれども。どんな？

前城氏：一つだけいいですか？協働ということと、計画づくりに、市民の皆さんに関わってもらうときに、行政側が絶対に忘れてはいけないことが一つあって。これが、主権者は市民なんです。対等な関係を作っていくというのも大事なんですけど、あくまでも主役は、主権者は市民だということを忘れてはいけないんですね。計画をなぜ作るかというと、主権者である市民がどのようなことを考えているのか。聞く手段として、ワークショップをして、意見を言って、『なるほど市民は、こんなことを思っているんだ』と『こういう町をつくってほしいんだ』というところを、計画に落とし込む。意見として落としこむということは、絶対外してはいけないので、言葉では対等と言っているんですけど、対等じゃないじゃないですか。市民と対等なのは市長ですから。で、我々市長の下で働くスタッフなんですから。その位置づけというのは、しっかり頭に入れてやっていかなくてはならない。とても大事なことなんですね。ちょうど私が総合計画を作った時に、全国的なブームな言葉だったんですよね。協働という言葉が。その時に間違った解釈が一つ世間で流れていたのが、『市民にやってもらおう』って言ったんですよ。『いや、違うでしょ』協働って。間違った協働が同じ時期に同じように進んでいったので、私たちは協働というのは、主権者が行政に意見を言える場を作って、しっかり声を集めて、計画を作って、それを実行するのが、一緒に実行するのが協働だよっていうところはすごく意識して大事に取り組んでいっていました。
もう一つですね。うまくいっているところだけ話したら、まずいんですよ。私ですね。先ほど市長からも話がありましたが、職員の中にはいろんな方がいて、トラウマを抱えている人がいて、そういう方々も一定の割合でいて、そういう方々は私は総スカンでした。私。『なんでやってくれた、こんなこと』だったんですよ。なぜ、わざわざ出向いていって、住民のみなさんにガガガって言われて、批判されないといけないんだって感じのところがあったので、ある一定の割合の方からずっと２か年間非難でしたね。本当に精神的に落ち込むくらい、非難でしたね。これは今でも、苦い経験ですね。だけど、７、８年くらい経ったときに批判していた職員が、『充があの時やったの今わかったよ』と言ってくれたのがすごく救いでしたね。涙が出ましたね。時間かかったけど、間違ってはなかったんだって。本当に苦しかったですよ。

市長：少し時間がありますのでね、今日受講生の皆様にもちょっと頭に置いていてほしいことがあるんですけど。ちょっと話がずれちゃうかもしれないんですけども、やっぱり市の職員の中にはですね。一定数、はっきり言いますけど、心を病んでですね離職していく、お休みになっていく方いらっしゃるんです

けど、その中で共通しているのは、やっぱり市民との間に入っていろんなトラウマを抱えてしまって、市民の前に立てない、もう市民が来ると声もかけられないという人がいるんですよ。どっちが悪いということではなくて、市民の側にもそういったことも考えていただいて、そういう職員が増えれば増えるほど、我々も職員体制が苦しくなって、市民の皆さんに真摯に耳を傾けたり、時間をかけたりすることがますますできなくなっていきます。やっぱり市役所であれ市役所職員であれ、同じこの街に生きているこの街で暮らしている、あるいはこの街で働いている仲間ですから、本当にこの協働というときに職員から見て市民も、市民から見て職員も本当に対等であってほしいと思っています。こういうことを本当にお互いに乗り越えていけると本当の意味での協働になっていくのかなという感じがしています。

〇大城：今市長がお話しているのは『市民性教育』につながっていくんではないかなと思います。それってすごく大事なんですね。それにつながる話は休憩を挟んでからそれにつながるところをお話したいと思います。

～　休憩　～

〇大城：受講生が２５人申し込みあったんです。今日一人も欠席なく、２５人の皆さんが参加されています。これってすごいことなんですよ。ほんとに。ということは、市民と協働とかですね、一緒にいろいろなことをやっていくときに、興味とか関心を持ってらっしゃる市民がやっぱりしっかりいらっしゃると思うんですね。全員が参加っていうのはとても驚きだなと思うので、まずは驚きの、いい拍手ということで。（パチパチパチ）
前半のお話を聞いてということで、受講者の方から『前半のお話で、行政の方も同じ仲間としてという気持ちは、まちづくりにとても大切だなと感じました。』という感想が早速上がってきました。やっぱり、気持ちを一緒にできるということは伝わっているんだなと私もとてもうれしいなぁと思いました。先ほどの続きですけれども、市民性教育というのが市長と充さんの言葉の中から共通しているものが出たと思います。私が思う市民性教育というのは『自分たちの地域は、自分たちでできるものはやろう』おんぶにだっこの市民ではなくて、できるものはやるよ。一緒にやりましょうよ。という市民を育てる、一緒にやっていくということの市民の教育が大事かなと思います。市長、充さん、それに対してどんな風に思いますか？

市長：市民性教育といっても市民を教育して育て上げていくというのとはちょっと違うんじゃないかな。何が適切なのかといつも思うんですけど。例えば、浦添が好きで好きでたまらないという浦添愛が強い市民がたくさん生まれれば生まれるほど、同じ目標を見据えられると思うんですよ。特に行政、市役所職員というのは少なくともこの街を何とかいいものにするのが仕事の職場なんですよね。一緒に協働してくださる市民の皆様がこの街に対する愛と思いが強ければ強いほど、私たちも一緒に思いを巡らせることができるので、やはりそういったところでも独りよがりならずに自分のため、自分の関心があることだけではなくて、この街の全体のこと、あるいは未来のこと、この街の子どもたちの次の世代のことまで考えて、地域愛を共有してそこでしか私たちはつながれないのかなと本当に感じていますね。

○大城：充さんいかがですか？

前城氏：市民性教育を私が言葉として知ったのが、総合計画を作った後のことだったんですね。『こういう言葉があるんだ』って、知ったんですね。Citizenship Education という英語ではそういうんだとね。そこと何がつながったかというと、総合計画って言って最終段階、一年半たったころですよ。総合計画の文言を整理している中で、市民から言われたんですよ。『充さん、この言葉は絶対入れてくれ！』と。自分たちのまちのことを、自分たちで考え、決め、行動するといったんですよ。僕はそれを聞いて、行動するまで入れたんですよ。それが大事なんですよ。それを総合計画の書き出しのところに入れてくれないかと。感動しましたよ僕。『自分たちのまちのことを、自分たちで考え、決め』ここまではやるんですよ。行動するってことは総合計画に書いたことを、市民としてできるものはやりますよ。という宣言なんですよ。これはすごいなぁと思ってですね。これが、この一年半の私たちの中で沸々と市民の中にできたんだなという感じがして、その時にその言葉を後々、これが市民なんだ、市民というのはそういうことが言えるのが市民なんだということをイギリスのまちづくりのとある書物で見て、Citizenship Education って書いてあったんですよ。なるほど、これが市民性教育なのかって。私は後で知りましたね。

○大城：とっても嬉しいんですけど、と思うのは、この講座を受けて一緒に考え、学びの先にある行動につながっていけるようにと思って、オリエンテーションの最初のところに入れたんですけど、それが一致したのですごくうれしいなと思っています。

前城氏：喜江子さんもう一ついい？これは与那原での取り組みの話なんですけど、去年から与那原はALD 関係の取り組みをトヨタ自動車さん含め進めていて、これと並行して知念高校生と沖縄女子短期大学の学生に、SDGs for school ということで学びの場を提供して、社会教育としてやっていたんです。この学びをしている中で、彼らは課題を見つけて、解決策まで見つけて、提案まで町長にやったんですね。彼らはその次のステップとして、地域電力会社を立ち上げたいと昨日プレゼンしに来たんですよ。その時に、彼らが『なぜやりたいか』ちゃんとプレゼン資料の中に書かれているんですよ。新電力会社で、上がった収益を私たちが提案した課題解決に使いたい。そのために、この思いに賛同してくれる地域の企業の方々に説明に回って、そして賛同を得て会社を立ち上げるというスキームを言ったんですよ。『わぁ、これすごい』と思って、私いったんですよ。『みなさん、市民になってますよ』って、市民とはこういうことですよと説明して、いやぁびっくりしましたよ。こうやって、学びの場ってすごく人を変えるなと思って、そのために市民性教育とか、社会教育っていうのは大事だよな。っていうのを昨日も思いました。以上。

○大城：私も社会教育畑から始まった地域づくりなんですね。やっぱり、市民がいろんなのをやりたいんですよ。社会に参加したい。でも心の中で思っているいろんな思いはあったかい言葉がいっぱいなんですけど、出てくる言葉が乱暴になってしまったり、批判のような感じになったりするのも結構あったりすると思うんですけれども、さっき充さんが一番最初のところで言っていた批判とかいろんなことを言っていても、本当は思っている、大事にしたい、この地域を大事にしたいんだよねと興味

関心があるからどうにかしようよと、なので、本当は心の中にあるあったかい言葉がそのまんま出せるような感じになると関係はとても作りやすいんだろうなと思ったりします。市民性教育というのは、私も基盤にあるなと思うのが、市民が育つ行政が育つということで一緒にいろいろなことができていく。そして、信頼関係を作っていくというのはすごく大変なんだろうなと思ったりするところなんですけれども。よく、充さんも市長も、すごく地域のことを人のことをとても考えてらっしゃると思うんです。じゃなければ、別に難儀しなくてもいいじゃないという風になって、充さんは充さんで多分動かないだろうし、市長も市民でいればどうってことないかもしれないことを市長になったというところを考えるとやっぱり、地域をどうにかしたいという思いがあるからだと思うんですね。よくしたいと思う気持ちがあるから、一生懸命動いて、変化をさせて、挑戦していくのがあるのかなと思って私、聞いていました。それで、市長も協働というただ協力しあうだけではなくて、分かり合って一緒にやっていくというところがとても大事じゃないかということをよくわかっていらっしゃると思っています。なので、これからどんなふうに。資して演説ではないです。（笑）職員ともですけども、市民ともですけど、どんなもの・ことができればと考えていますか？

市長：これを受講している皆さんは、市民協働とかまちづくりに関心がある人たちだと思っているんですよね。その時にいろんなことを考えるんですけど。今日ちょうど充さんがいるのでいい機会なんですけど、僕皆さんに申し上げたいのは、皆さんが市役所あるいは地方自治体と一緒に何かまちづくりをやりたいと思ったら、あなたの町の前城充を探すことです。と僕は思っているんですね。充さんのような人がいるはずです。あるいはいなければ、充さんの素みたいな人がいるはずなんです。その人たちを前城充風に育て上げていくっていうのは、僕は協働の一つのわかりやすい一つのステップなのかな思っています。ですから、何か市民の皆さんがこういう協働をして、こういうまちづくりをしたいと思ったときに、ただ闇雲に声を上げるだけじゃなくて、まず具体的にですね、あなたのまちの。あなたの前城充を探す、あるいはあなたのまちの充を育てていく。そういうことをですね、ぜひやってもらいたいなと思っていますが、ここで僕は充さんに質問があるんです。浦添の前城充を作ろうっていう話をしていますけど、実際当事者として『結構前城充つらいんですよ』というそういう経験は？

前城氏：３０代・４０代はなかったですね。突っ走ってきたから。で、４０代後半くらいから物心ついて、『よくやった』って感じで。だから、浦添市役所の職員も３０代４０代の方は突っ走ってくださいと言いたいですね。

市長：先に突っ走った前城さんとして、今後第２・第３の前城充にこんなところは注意してね。俺こんなところ苦労したよというのはありますか。

前城氏：一番大事なのは、時々振り返ってですよ、振り返って。さっき批判があったって言ったじゃないですか。あの時ちょうど振り返って、誰もいなかったと思います。職員。突っ走りすぎたっていうのもあります。で、もう一つ要因があるんですよ。大きな要因なんですが、私の後ろ盾は当時の城間俊安町長でした。もう何やってもやれとしかいいませんでした。思うとおりにやれ、俺が責任持つ

からやれと。これとっても大事ですよ。市長大事ですよ。

市長：わかりました。第２・第３の前城充ができるように、私は第２の城間町長として頑張ります。

前城氏：私、島袋純先生と再会してスイッチが入ったと話したじゃないですか。会ってなかったら今の私いないんですよ。職員も何人か聞いているので、言っておきたいんですけど。転機は必ず来るんですよ。私、役場入った時に動機不順でしたよ。土日休み、５時に帰れる。これでしたから。本当に。だけど、３９の時に島袋純先生と会ってスイッチが入って今の私があって。そこで、自分を変えられるか変えられないかはもうその人次第ですよ。そして、時間が来る前に今日この本紹介しようと思って、持ってきたのがあって、受講者の皆さんにこれ読んでほしいなという本が一つあるんですけど、紹介していいですか。

○大城：どうぞ、どうぞ。

前城氏：田中元子さんという方の本です。後でまた事務局から流してくださいね。この方、もう私の概念を覆してくれた方。この本が届いたのが、３日前。なぜこの方の本をこの方を紹介したかというと、先週与那原町の木工建築家の方と話しをしに行ってその方が私に言ったんですよ。『私、自分の技術を生かして、地域にある空き屋敷をリノベーションしてまちづくりをしたい』って言ったんですよ。『えっ、なんでこんなこと考えたの？』『いやいや、こういう考えをした田中元子さんという方がいて』と。その時に初めて田中元子さんという方を知ったんですが、私がなぜびっくりしたかというとですね。公共って普通自治体がやるじゃないですか。市町村が。公共＝市町村の仕事。でも、この方は違うんですよ。自家製公共づくりという言葉で自分で公共空間を作っているんですよ。この発想すごいなと思ってですね。でもまだ本も半分も読んでいないんですけど、もう面白い。この人沖縄に来てもらおうと思っています。こういう書物から考えが出てくることもあるので、ぜひぜひ田中元子さんの本は読んでほしい。『マイパブリック』ですよ。後でまた事務局の方紹介してくださいね。

○大城：今回ですね、充さんと市長に入っていただいて、特に流れとか大きなことを決めなかったんですよ。なぜかというと、たくさんいろんなものを持ってらっしゃるので、話の中から引き出しできるんじゃないかなと思ったんですね。それと、やっぱり協働というときに、企業間でやるから協働ということではなくて、理解しあうというところで、昨日の那覇市の１００周年記念で櫻井先生が『行政と市民がなぜ一緒にやる必要があるのか。本当に必要課題が多様化して課題が本当に深刻になって

きている。そうなったときにやっぱり、行政だけではなくて、市民だけではないというものが一緒にやりましょうということに繋がっている。確かに、お金も大事ではあるんですけど、それだけの問題ではなくて、協力し合いながらやらないといけないというところまで来ているんだ』と仰っていました。ほんとにそういうところなんだなと実感しながら聞いていました。充さんが、住民自治、住民を参画してっていうときには、市民がしっかり行政のことも知ってということがあったと思うんですね。行政も伝えて、市民も伝えてという大事さの部分があったんではないかなと思います。今日ですね、いろんな職種の方がいます。行政職員もいます。多分、主婦の方も。受講生の中に、『締め切りがもう終わったんですけど、自分達の子どものことを考えると、やっぱりいろいろ考えたいなと思うんですけど、参加できませんか。』というお言葉もありました。それはすごくいいなと思って、事務局の若い子たちと『ぜひぜひ入ってもらおう』と。それすごく素敵ですよね。

～質疑応答～

質問１『行政の方たちと接するときに日ごろからできることがあれば教えてほしいです。』

市長：難しい質問ですね。端的に思い浮かんだことだけを言いますけども。行政職員もいろいろなものを抱えていて大変なのは事実なんですよ。ですから、行政職員の皆さんが例えば『この人と組んで、この人が動いてくれることで自分少し楽になるな。』って思わせきれるかどうかですね。逆に市民が来て、協働することで、『またなんか余計な事増えちゃうな』って思うと、どうしても二の足を踏んでしまいますので、逆に行政がやろうとしていること、あるいはうまく手が届かないところを皆さんにフォローしていただけるんだというのがわかれば、職員も一緒に一歩踏み出していこうという気になるのかなという感じがしています。市役所職員にとってこんなプラスがあるということを、皆さんの方で示していただけると、一緒に協働しやすくなるかなという感じがいたします。

前城氏：今市長がお話したところと被ると思いますけども。何かやりたいことがあって、それを『私はこれをこういう風にやりたい』ということを話せるような方がいれば、その方と信頼関係を作ってですね。入口をしっかり作っておくのがとても大事で、そうすると次の方が『だれか紹介して』となった時に、職員が紹介するともう信頼が出てくるので、そんな感じで繋がっていくというのが大事かなと思います。それを積み重ねていくと次の計画づくりの時に呼ばれたりするので、そしたらもう関係ができているのですごく入りやすいし、安心かなと思いますよ。

質問２『浦添市もSDGｓ推進する中、企業及び市民の取り組みは今、どれくらいの広がりがありますか。本まちづくりアカデミーは住み続けられるまちづくりをテーマに沿ったものを考えられるが、その他の項目も含めて。』

市長：今日は正直にお答えしますけれども、ＳＤＧｓというのはいろいろなところで取り組みがされていますけれども、じゃあ具体的な施策の中で今落とされて、企業とのコラボレーション等含めて、進んでいるかというとまだまだ途に就いたところかなという感じはしています。ただ、ＳＤＧｓとい

う基本的な考え方は皆さん共通して持ち始めていますので、何かあればこれからもＳＤＧｓの時代だから、環境負荷の問題であったり、あるいは貧困の問題なんかにしても、取り組んでいけると思いますけど、まだ大きく具体的には進んでいないのかなと思います。これからはより一つ一つを具体的な政策の中で落としていく必要があるだろうと思っています。

前城氏：ＳＤＧｓが私の中で知って行動を始めたのが３年前で。その時はほとんどの人が知らなかったですね。ちょうど南風原から与那原に移ったころです。ほとんど知識がなかったです。あれから２年たって、どこが変わったかというと、学校が変わりましたね。学校の指導要領に去年から入っていますかね。もう子ども達がＳＤＧｓを言うようになりましたね。びっくりしました。だから、これから子ども達から学ぶような一年になってくるんじゃないかな。それで、企業の方も去年あたりから結構関心を示していて、私の方によく声をかけてくるようになりました。それで、やっぱり一番遅いのが行政かなという感じはしますけど。まぁ、追々行政の中にも浸透していくのかなと思います。ただ、行政がやっていることはＳＤＧｓに関係あることですから。ほとんどつながっていますよ。

○大城：案外気づいてないだけかなと思ったりするんです。そのＳＤＧｓというのはですね。なので、普段にずっと行われていることに細かく気づいていくっていうのがですね、そのＳＤＧｓに繋がっていくのが大きいんじゃないかなと思ったりするんですけど。生活を大事にですね。

質問３　充さんにお尋ねしたいのですが、『南風原で住民会議で協働を作ってこられて、３年前に与那原に行ったなかで、与那原での協働の取り組みというのは、どういう段階なのかお聞かせください。』

前城氏：先ほど、学生の話をしました。知念高校と女子短期大学ですね。それをこれまでと同じような方法で取り組んできて、成果が出たんですよね。でも、一般の町民との協働・住民参加を見たときには、やっぱり南風原ほど経験を積んでいないなというのがあります。町民も行政も。総合計画の作り方からしても回数をそんなに踏んでいないことも分かったし、作られている中身を見ても、やっぱり南風原でやってきたものとボリュームが違うというのがあるので、次２年後に見直しがあるので、その時にいろいろ町民の皆さんと参加のシステムを整えていこうかなと今考えています。
ただやっぱり、学生を見ていくと変わっていくなというのは見えてくるので、やっぱり一緒だよなと。気づいていって、自分で自分を変えていっているのが見えてきているので、やっぱりこの手法は間違いないんだよなということがわかりました。

質問４　職員の参加状況というんですか。市民との信頼関係状況というのも教えてもらってもいいですか？

前城氏：ソーシャルキャピタル（社会関係資本）という視点で行くと、与那原はすごいと思います。なぜかというと、やっぱり大綱曳がありますよ。これ、どこもまねできないですよ。やっぱり町民プライドがあります。これはどこの市町村にも多分負けないと思います。財産ですね、その与那原町が

持っている脈々と続いている伝統行事から生み出されているちびっこプライドがある。その行事には、職員が必ず参加しているので信頼はあるわけですよ。これは財産だと思いますね。
○大城：ありがとうございます。時間になるので、市長も１分、充さんも１分、協働ってほんとに、市長が思う協働ってなんだろう？充さんが思う協働って何だろう？というのを最後にお話しいただければありがたいです。

市長：本当にこれは難しい問題で、協働って何だろうと考えるんですけど、自分流にいえばこのまちが大好きな人たちが一人でできることって知れていますので、本当にこのまちを何とかしたい。本当にこのまちが大好きで大好きでたまらないという人たちが集まった時に起こる大きなエネルギーが本当に協働の喜びだと思いますし、協働のやりがいとかですね。そういった意味だと思うんですよ。必ずしも協働というときに、行政職員と市民という形ではなくてですね、市民同士でも起こるし、３人４人のグループで何かまちづくり、このまちのために、このまちの未来のために何かを行いたいとすればですね、それは協働だと思っているんですよ。その中でまた、市役所職員が入っていくあるいは外からの人も入ってくる。老若男女が集っていくことで本当にまちができるのかなと思っています。ですから、これからが本当に自分のまちが好きで好きでたまらない人。『わったー、うらしー、まーんかい、まきらんどー』っていう人たちをたくさん、たくさん作っていけばいいまちができるんだろうという風に思っています。

○大城：はい、ありがとうございます。では、充さんいかがですか？

前城氏：私も市長と同じような考えで、協働というところを最初に持ってくるとこれに向かっていくのはかなり難しいので、回答ってないから難しいので。私の中で、私のモットーというのがあるんですけど、参加している皆さんにも言いたいんですが、『まずは動け！そして、考えろ！』まずは、動くことです。あとで考えなさい。逆だったらですね、絶対上手くいかないです。考えて、考えて、今かな？タイミング今かな？してたら、逃してしまいます。だから『まずは、動く、そして考えろ』なんです。これは、６０点式と私。６０点式ね。皆さん９０とか１００考えて動くんですけど、もう時期過ぎてますよ。もう、５０点５０％くらいから、もう動けと。それを頭の片隅に入れて、いろいろ動いてみてください。そしたら必ず、いいことがまっています。

○大城：はい。ありがとうございます。あっという間に時間が来ました。市長も充さんもですけど、やっぱり行動につなげているというのが大事かなと本当に私も聞いていて思いました。やっぱり、住んでいるところって好きですよね。でなければ、行動に繋がらないんではないかなと。行動するためにやっぱり積み重ねてきて、それを長年やってというのがあるんではないかなと。なので、参加して協力し合いながら、一緒に考えてコミュニケーションを交わして、『じゃあ地域をどう作っていくか』ということをやっぱり市長も充さんもやってらっしゃることだなと聞きながらすごく思いました。なので、これからも発展していくだろうなという風に思いました。ということで、今回の鼎談を締めくくりたいと思います。ありがとうございました。

浦添市まちづくりアカデミー実施要綱

令和元年９月30日市民部長決裁

（趣旨）

第１条　この要綱は、まちづくり生涯学習と市民協働の推進を図るため、市民が市民協働に対する理解をより深め、その取組に必要となる知識及び手法並びにその実践ついてともに学ぶ講座を開設する浦添市まちづくりアカデミー(以下「アカデミー」という。)の実施に関し、必要な事項を定めるものとする。

（講座）

第２条　アカデミーの講座(以下「講座」という。)は、定期講座及び公開講座とする。

２　講座の内容は、次に掲げるものとする。

(1)　市民協働に対する理解をより深め、その取組に必要となる知識及び手法に関すること。

(2)　ＮＰＯとの市民協働の実践に関すること。

(3)　その他まちづくり生涯学習と市民協働の推進に資すると認められること。

（対象者）

第３条　講座の対象者は、本市のまちづくり生涯学習及び市民協働に関心のある者とする。

２　市内に住所を有しない者が定期講座の受講を希望するときは、本市のまちづくりに取り組む意欲のある者を対象者とすることができる。

（定期講座の受講手続）

第４条　定期講座の受講を希望する者は、次の事項を記載した受講申込書を市長に提出するものとする。

(1)　氏名

(2)　生年月日

(3)　住所

(4)　電話番号及びメールアドレス

(5)　講座で学びたいこと及び市民協働により取り組みたいこと

(6)　その他受講にあたって必要な事項

２　市長は、前項の受講申込書を提出した者が前条の要件に該当すると認めるときは、受講を決定するものとする。

（受講料）

第５条　市長は、アカデミーの運営に必要な経費の一部を受講料として徴収することができる。

２　受講の決定を受けた者(以下「受講者」という。)は、受講料を市長が指定する日までに納付するものとする。

３　受講料は、受講者が講座を受講しない場合においても、返還しない。ただし、市長が特別の理由があると認めたときは、この限りでない。

（受講決定の取消し）

第６条　市長は、受講者が次の各号のいずれかに該当すると認めたときは、受講の決定を取り消すことができる。

(1)　受講者が受講料を納付しないとき。

(2)　虚偽の申込により受講の決定を受けたとき。
(3)　他の受講者の迷惑となる行為のあったとき。
(4)　その他受講の決定を取り消すことがやむを得ない事情があるとき。

（受講証書の交付）

第７条　市長は、定期講座の受講を終えた者に対し、受講証書を交付するものとする。

（実施報告）

第８条　市長は、アカデミーの実施状況について、適宜に、浦添市まちづくり生涯学習推進本部及び浦添市まちづくり生涯学習推進協議会に報告するものとする。

（学長及び運営支援サポーター）

第９条　アカデミーの学長は、市長をもって充てる。

２　学長は、講座に参加することができる。

３　市長は、アカデミーの運営を支援するため、運営支援サポーターを置くことができる。

（庶務）

第 10 条　アカデミーの運営に関する事務は、市民部市民協働・男女共同参画課において処理する。

（委託）

第 11 条　市長は、アカデミーの運営の全部又は一部を委託することができる。

（雑則）

第12条　この要綱に定めるもののほか、定期講座の期間、定員、内容、受講手続及び受講料の額並びに公開講座の内容その他アカデミーの運営に関し必要な事項は、その都度、別に定める。

附　則(令和元年９月30日市民部長決裁)

この要綱は、令和元年10月１日から施行する。

附　則(令和２年３月９日市民部長決裁)

この要綱は、令和２年３月10日から施行する。

令和３年度　浦添市まちづくりアカデミー定期講座実施要領

令和３年３月 19 日市民部長決裁

この要領は、浦添市まちづくりアカデミー実施要綱(令和元年９月30日市民部長決裁)第２条第３項、第５条第１項、第６条第２項及び第12条に基づき、令和３年度まちづくりアカデミーの定期講座(以下「定期講座」という)の実施に関し必要な事項を定めるものとする。

1　期間

定期講座の期間は、令和３年８月から同年12月までとする。ただし、やむを得ない事情が生じたときは、期間を変更することができる。

2　テーマ、目的、成果目標

(1)　テーマ

「わたしがまちを輝かせる」

※地域の抱える課題を、住民自らが解決に向けて動くことで、まちづくり協働が活発になり人もまちも輝く。

(2)　目的

①　まちづくり協働に必要となる実践的な知識及び手法を知ること。

②　市民の視点で地域を知り、課題解決に向けて実践できるようになること。

③　まちづくり協働に取り組む者と連携することができるようになること。

(3)　成果目標

①　受講した市民が協働によるまちづくりに積極的かつ効果的に関わること。

②　受講した市民が地域の課題を自らの問題として捉え、まちづくり協働に取り組むことができるようになること。

③　まちづくり協働を理解し、取り組む市民の連携が構築されること。

3　講座の運営

（１）講座の運営は、浦添市まちづくりアカデミー実施要綱（令和元年９月30日市民部長決裁）第10条に基づき、委託により行う。

（２）委託の内容については、別途、仕様書により定める。

4　講座の日時及び内容

定期講座の日時及び内容は、仕様書に基づき、委託事業者と協働して定

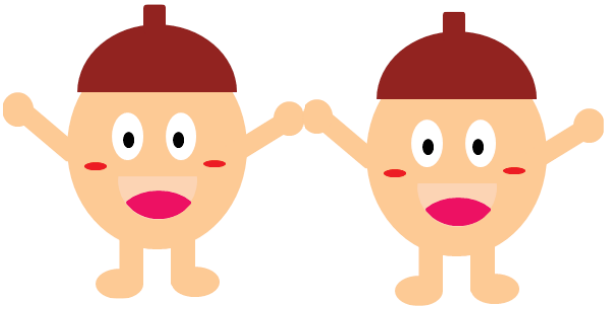
める。

5　受講手続

受講申込書の様式、提出方法及び提出期限は、仕様書に基づき委託事業者と協働して定める。

6　受講料

受講料は、5,000円とする。

附　則(令和３年３月 19 日市民部長決裁)

この要領は、令和３年３月 19 日から施行する。